

論文 「三つの一神教における宗教と紛争・・・平和への道筋はあるのか」 (全10回)

第4回、キリスト教の理想と現実

塩尻和子（筑波大学名誉教授）

1、ユダヤ教の改革者イエス

ユダヤ教の神は、イスラエルの民にとってのみ唯一の絶対者であり、歴史を支配する人格神であり、天地の創造主なのであるが、この限定された「神」を、生ける神として万人の父となしたのがキリスト教である。ユダヤ教徒ナザレのイエス（BC 6／4頃～AD 30頃）が、厳格な戒律に疑問をもち、ユダヤ教の改革を目指して戒律を超越する信仰を説いてまわった。神を「父のような身近な存在」とみると「神の国」の教えを広め、下層階級から熱狂的に支持されたことから始まる。当時のパレスチナ一帯では、ユダヤ教の戒律を正確に遵守するためには、かなりの経済力を持っていることが必要であり、それが可能な人々は決して多くはなかったからである。

「神の国」とはヘブライ思想では、異教徒や敵対する民族が減びて正義の神が王として支配する、選民だけの理想的な正義の王国のことを指す。しかしイエスは、正義の王国ではなく平和と愛に満ちた神の国が実際に近づいていると信じて、子供のようになって愛の王国に入ることを教えた。神を「**父**」と呼ぶことはユダヤ教時代にはなかったことで、ここから教父時代になって、「三位一体論」が起こってくることになる。アバは「おとうちゃん」という程度の幼稚な表現であり、神の国へ入るためにも、子供のようになって神に従うことを象徴的に示した。

イエスの出現以前にも、ユダヤ教の中に新しい教団が発生しており、そのなかに「死海文書」で知られる「クムラン教団」や「エッセネ派」、洗礼者ヨハネ（イエスの従兄）が率いる「ヨハネ教団」などがあつた。イエスはヨルダン川でヨハネから洗礼を受け、宗教家として活動を開始した。イエスがどこかの教団に属していたかどうかはわからない。宗教活動の場としてヨハネは荒野に留まり、イエスは村や都市へと向かった。短期間にあまりにも多くの大衆に支持されたことに恐怖感を抱いたユダヤ教の祭司階級と、当時パレスチナ一帯を支配していたローマの官憲によって、反乱者として逮捕され、十字架刑にかけられて死亡する。

しかし死後、3日目に墓が空になり、甦って昇天したという信仰が広まり、ユダヤ教から独立した新しい宗教として発展することになった。イエスを救い主キリストとして信じる集団が、パウロによってユダヤ人の枠を超えて、異邦人伝道に踏み出し、やがてローマ帝国の国教となり、世界宗教へと成長したのである。

現在、数多くの宗派・分派があるが、総数では世界で24億人を超える信者数を持ち、今日では世界最大の宗教勢力となっている。

2、三位一体論：分裂の要因

イエスはおそらくベツレヘムではなくナザレで生まれ、長男は父親の生業を継ぐという伝統に従って、大工であった父親ヨセフの仕事を受け継ぎ、大工業を営んでいたと思われる。そのつましい暮らしの中から、一般庶民の1人として、ユダヤ教徒の義務である厳格な律法遵守の命令への反発を意識していたのであろう。

イエスの人生に関して、特に母マリアの懐妊やベツレヘムでの誕生、東方の3博士の訪問などは、後世の神格化の過程で作られた物語である。したがって、イエスは自らを「人の子」とは言ったが、決して「救世主」とであると主張してはいない。イエスが自らを語った「人の子」は、普通の人間を指す言葉であったが、イエスの死後、原始教団によって特別な人間を示す用語とされ、後の「キリスト論」へ結びつく思想となった。イエスが自らを救世主、メシアであると宣言したことは、確認されていない。

歴史的にみて確かなことは、イスラエル民族だけの「神」として顕現したヤハウェを、イエスが愛情深い「父なる神」として万人に受け継いだということである。イエスの神は普遍的な神であり、やがて「父親のような慈悲深い神」という以上に、文字どおりの「父なる神」と考えられ、「子」の存在が想定される「三位一体論」につながっていくことになる。そして、この論理はやがて「父と子」の関係から大きく踏み出し、イエスの神格化を確定する議論を呼ぶことになる。それこそが「三位一体」であった。

ユダヤ教から離れたばかりのキリスト教会では「人間には原罪がある」とするヘブライ語聖書の思想に基づいて、イエスの十字架刑の死を人間の原罪に対する贖罪とすることで、「イエス」の存在を神と関係づけること、つまり「イエスの神格化」が成功した。「三位一体論」は、「愛情深い父なる神」の子であることを説明するものではなく、イエ

スの神格化そのものを確定する教義に他ならない。

もともと「三位一体論」はヨハネによる福音書にその基盤をもっている。

初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。(1・1～2)

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。(1・4)

新約聖書のこの記述が教父時代(AD 2～8世紀)に論争となり、いくつかの公会議を経て、最終的に451年のカルケドン公会議における「カルケドン信条」によって、以下のように決定された。少々読みにくいかもしれないが、正確を期すために『キリスト教大事典』から引用する。

されば、我らは聖なる教父らに従い、すべて相一致して、一にして同じき子、神性においても同じく完全、人性においても同じく完全なる我らの主イエス・キリストを告白すべきことを人々に教う。主は真に神にして真に人、同じく理性心と肉体とを持ち、神性によれば父と同質(ホモウシオス)、人性によれば我らと同じく同質、罪をのぞくほかはすべてのことにおいて我らと相似たり。神性によれば万代の前に父より生まれ、人性によればこれらの末の日、神の母、処女マリアより我らのため、我らの救のため生まれしなり。一にして同じき、キリスト、子、主、独子は混交なく、転化なく、分割なく、分離なく、存在する二世のうちに認められるべし。二世の区別は融合によりて取り去られるにあらず、むしろ各性の特質が保存せられて一の人格と一の位格のうちに併存し、二つの人格に分離・分裂されず、一にして同じき子、一人子、ロゴスなる神、主イエス・キリストにして、預言者らの当初より述べ、主イエス・キリストは自ら我々に教えたまい、また教父らの信条の我々に伝えしがごとく。(「カルケドン信条」キリスト教大事典、2000年、教文館)

こうして、イエスの神格化が決定すると、原罪から清められ選ばれた民となるためには、一方ではどのように厳しくとも神が定めた厳格な律法に従うという「人間の努力」に

よって選ばれた民となるか（ユダヤ教の立場）、他方ではひたすら「啓示を信じて」待つことによって救われるとするか（キリスト教の立場）、ユダヤ教とキリスト教の間で、2つの生き方が突きつけられることになる。

3、カルケドン決定の影響

三位「父・子・聖霊」のうち、論争の的となるのは「父と子」の関係であるが、人間イエスに神性を付与したことによって、キリスト教はユダヤ教から明確に独立すると共に、「カルケドン信条」を受け入れるか否かによって、新生のキリスト教の内部でも、大きな分裂が引き起こされるようになった。それらの主なものは以下の集団である。

- ① 公認派.....父と子は同質であり、キリストの本性は神であり、神とキリストは同格であるとして両方の性質を認める。（カトリック、正教、ほとんどのプロテスタント）
- ② アリウス派（アレイオス派）.....父と子は類質であるが、子は神によって創造された不完全なものとして、神とキリストの同一性を否定する。（神≠キリスト）
- ③ ネストリウス派.....キリストの人間性を強調、「神となった人間」として神とキリストの分離を主張してキリストの神性を否定するが、神聖性は肯定する。（中国では景教、イラン・イラク・シリアなどで東方アッシリア教会、シリア正教会など）
- ④ キリスト神性説派.....合性説（単性説）、統一説とも呼ばれる。受肉後のキリストには神性のみが現れるとする。キリストは神の意志の体現者であり、マリアは「神の母」（神＝キリスト）とされる。（エジプトのコプト正教会、エチオピア正教会など）

4、原罪思想と隣人愛

ヘブライ語聖書創世記第3章では、原初の女性エヴァが悪魔の囁きにされて知恵の木の実を取って食べ、そして、夫をも誘惑してその木の実を食べさせたことによって、この世界に原罪が入り込んだと記述されている。したがって、女性は生涯、産みの苦しみ、出産の苦しみをその身体に背負わなければならないという記述がみられる。これらの思想もユダヤ教からの独立を意味するが、これによって、人間は生まれながらに罪を負う存在となる。「原罪」とは、人間が生まれながらに持っている罪であり、それは人間が神になり世

界を支配しようとする虚無的な欲望によって、神と人との創造的な関係を破壊するものだと考えられる。

初代のキリスト教徒たちは、イエスは、自分の命を犠牲にして、人類の罪を救うために身代わりとなって十字架刑で死亡したと考えた。イエスの死と復活を「贖罪の死」として、罪からの解放であると定義したのである。このようなイエスの思想を最もよく表す章句は「山上の垂訓」である。マタイによる福音書5章9節（新共同訳『聖書』日本聖書協会）には「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」とある。山上の垂訓はさらに以下のような「究極の愛」を教えている。

あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。（5・38～39）

あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。（5・43～44）

「目には目を、歯には歯を」という報復罰はメソポタミア一帯に伝統的に存在した戒律であり、この戒律を遵守することは神の意志に従うこととなり、それによって社会の平安が保たれるが、イエスはこれらの規範をあえて破るような説教をすることによって、無償の愛に基づく「隣人愛」の本質を教えようとした。

しかし、教会は「あなたの敵を愛しなさい」は現実には実行不可能な理想であり、その代わりに「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（7・12）のほうを黄金律として人々を導いたのである。

5. キリスト教の「宗教と政治」

キリスト教は当初より「政教分離」の理想を持っているとして、その論証として、「カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」（マルコ12・17など）というイエスの言葉がよく証拠として引用される。単純に考えるなら、イエスは、霊肉の二元論を認める立場から精神世界を社会的世界より上位に据えたと受け取れる言葉である。確か

にイエスの教えの中軸は、肉的社会的側面を卑しいものとして退け、靈的精神的側面のみを認めるものである。イエスは政治力を志向することもなく、政治や社会制度にはなんらの関心さえも示すことなく、もっぱら精神的個人的な救済を説いたとされる。

この「政教分離」の教義を正当化するために、納税問答についてのイエスの言葉「カエサルのはカエサルに」を根拠として、キリスト教会は草創期から「政教分離」を原則としていたという主張が、今日でも根強くみられる。

しかし、注意すべきは、本来、「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」とは「神に対する務めと世俗の支配者に対する務めとを共に行うべきである」と解釈される言葉であり、イエス時代から政治と宗教の分離は想定されていなかったとみられる。

確かにイエス自身は、政治・社会という肉次元には関心を示さず、宗教という靈次元だけに意識を集中させたが、イエスの死後、300年を経てローマ帝国の国教に採用されてからのキリスト教が政治や社会と深く関わっていくことになるのは、当初から潜在的に政教一致の要因が混在していたからでもある。この点を強調したのがカルヴァンであり、後のピューリタニズムに受け継がれたと思われる。

この問題を、時代を追って検討すると、西暦313年にキリスト教がローマ帝国内で公認され、さらに392年にはローマ帝国の国教とされて以降、近代に至るまで、宗教が政治を支配するようになるのである。395年にローマ帝国がビザンツ帝国と西ローマ帝国に分裂すると、教会も、コンスタンティノープルの正教（東方正教会）とローマのカトリック教会に東西分裂し、互いに破門し合ったが、間もなく476年に西ローマ帝国は滅亡する。

その後、1000年余りの歳月の後、1517年、ルターの教会批判から始まった宗教改革と、1545年から始まったカトリックによる対抗宗教改革によって、新旧キリスト教の対立が広がった。カトリック教皇の権威は、この宗教改革を経て政治的には弱体化したが、宗教的には変わらず保たれて、今日に至っている。双方が破門を解いて和解するのは、実に1965年になってからのことである。

6、敵を愛することは可能か

「敵をも愛せよ」という、どのように崇高な人間でも到底実行できそうにない厳格な理想

を教えたイエスの死から2000年後の地上では、中世の「十字軍の遠征」や「異端審問」などをはるかに超える大規模な殺戮が世界のあちこちで、止むこともなく展開されている。「敵をも愛せよ」という、これ以上はあり得ないと思われる崇高な教義や思想は、理想的であればあるほど、人間同士の敵対関係を生みやすいということは、実は人間の歴史そのものが証明している。

イエスの山上の垂訓は「あなたがたも聞いているとおり」という言い出しでヘブライ語聖書の律法、つまりユダヤ教の戒律と対比しながら、あまりにも理想的で現実には実行が不可能なほど厳しい道德率を説いている。究極の隣人愛である「敵をも愛しなさい」という教えと共に、イエスがなぜこのような現実離れした教義を展開したのかという疑問についてはキリスト教神学のなかでも大きな論争点となっている。

高名な新約聖書学者の八木誠一によると、「右の頬を打たれて、左の頬を向けてやる」ことは、「目には目を」というヘブライ語聖書の報復罰の規定からみれば、社会正義の規範から逸脱した違反行為であるが、「神の支配」のもとでは、人間の行為は定められた律法によって決定されるのではなく、「神の支配」によって決定されるのであり、人間の側の意図的な判断を超えていることになるという。「敵を愛しなさい」というイエスの教えは、実際には実行不可能な究極の愛を命じることによって、人間の能力を超えた絶対的な神の計画やその崇高な命令を、逆説的に私たちに教え示しているのであろう。その図式は八木によれば以下のように説明される。

神の支配のもとに生きる人間には（つまり自己レベルでは）、相手が誰であろうと——悪人であろうと、何をしようとする相手も神のもとにある人格なのだから、基本的に隣人として受容し、共生を肯定するのが当然かつ自然なのである。そのうえで相手に対して何をするかは創造的自由の事柄であって、あらかじめ規定できることではない。イエスはその一例を示している。（八木誠一『新約思想の構造』岩波書店、2002年、125頁）

キリスト教にみられる「隣人愛」や「黄金律」の教え、ユダヤ教やイスラームの日常生活上の戒律や道德の精神などが、文字どおり正しく実施されていれば、宗教的暴力やテロ

など起きるはずがないと考えるのは、まさに現実を知らない甘い考えということになるであろう。理想が高ければ高いほど、人間は暴力的になる、とはよく言われることであるが、それでも、イエスの死には、人類にとって忘れてはならない意味があると思う。

余談になるが、筆者はカルケドン公会議が開催されたトルコの町を訪れたことがある。ニカイア公会議やエフェソス公会議の場所は、それぞれトルコのイズニクとセルチュク郊外にあり、今日でも遺跡が保存され記念碑も設置されている。しかし、カルケドン公会議の場所は、ボスフェラス海峡のアジア側に現存するカドキョイという港町であるが、公会議の遺跡も痕跡もまったく見られない。小さい教会を見つけて関係者に尋ねて見たが「知らない」と言われたのには、かなりがっかりさせられた。